

# 令和7年度 ADCA セミナー

「農業から広がる国際協力の世界～開発コンサルタント  
が語る多様なキャリアと ODA の舞台裏～」

## 実施報告書

令和8年1月

一般社団法人海外農業開発コンサルタンツ協会（ADCA）

## 1 概要と目的

我が国の開発途上国への政府開発援助（ODA）の基本方針は、貧困削減のための農業・農村開発分野の協力を重視しており、生産力向上などの農業農村開発を効果的・効率的に実施するために、開発途上国の政策や援助需要を踏まえつつ、我が国の経済社会発展や経済協力の経験を途上国の開発に役立ててきました。また、優れた技術、知見、人材、制度を活用して、貧困削減に向けたプログラムを展開してきました。

海外農業開発コンサルタンツ協会（ADCA）では毎年、世界の農業農村開発の展開について国際協力の関係者と今後の可能性や方向性について考えるセミナーを開催しています。当セミナーでは、ADCA 会員企業等で国際開発事業に携わっている専門家・技術者の経験を通じて、開発途上国における農業農村開発協力の実績を正しく社会に発信し、次世代のグローバル人材となり得る学生を主な対象として農業農村開発協力の魅力を伝えることを目指しています。また、世界の農業や食料を取り巻く情勢について情報提供し、我が国の ODA における農業農村開発協力への理解を促進することを目的としています。

## 2 プログラム

日時： 令和 7 年 11 月 29 日（土）13：00～17：00

場所： 〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町 10-5

JICA 市ヶ谷ビル（地球ひろば）6 F セミナールーム 600・603（オンライン併用）

13：00－13：10 開会

司会進行：熊谷 徹（ADCA 企画部長）

開会の辞：堀田 昇克（三祐コンサルタンツ代表取締役社長）

13：10－14：40 第 1 部 パネルディスカッション

進行：森 卓（NTC インターナショナル(株)代表取締役社長）

- ガイダンス「国際協力と開発コンサルタント」
- パネルディスカッション「ベテランコンサル&若手コンサルのホンネ」
- 質疑応答

14：50－16：00 第 2 部

グループワーク 「プロジェクト形成の模擬体験」

進行：三門 茜（日本工営(株)技師）

WEB 座談会 「若手コンサルタントに何でも聞いてみよう」

進行：青山 健太（日本工営(株)技師）

16：20－17：00

第 3 部 交流会（地球ひろば 2 階 J's Café にて開催）

開会の辞：清水 敬祐（日本工営(株)課長）

### 3 対象

農業開発、又は国際協力に関心のある学生および社会人

### 4 主催者

海外農業開発コンサルタンツ協会 (ADCA)

### 5 後援者

農林水産省

独立行政法人 国際協力機構

公益社団法人 農業農村工学会

### 6 コーディネーターおよびパネリストの略歴

#### コーディネーター

##### 森 卓

NTC インターナショナル(株)代表取締役社長。ADCA 理事。農業分野の開発コンサルタン  
トとして 25 年以上にわたり海外業務に従事し、アフリカ、南米、トルコなどにおける様々  
な案件を担当。

#### パネリスト

##### 福田 康

(株)三祐コンサルタンツ参事。国内業務を経て 23 年以上にわたり海外業務に従事し、主に  
地下水利用のための井戸施工やドリップ灌漑施設に関する案件を担当。専門は地球科学

##### 江口 敦俊

(株)三祐コンサルタンツ課長。国内業務を経て 15 年以上にわたり海外業務に従事し、灌漑  
施設設計、環境社会配慮、情報処理などの案件を担当。専門は農業土木。

##### 福長 文香

NTC インターナショナル(株)主任技師。10 年以上にわたりコンサルタント業務に従事し、  
灌漑セクターの調査、国内での栽培試験、各種調査案件や民間連携事業の支援、稲作振興プ  
ロジェクトにおける研修マニュアル作成などを担当。専門は作物学。

## 井ノ口 華帆

NTC インターナショナル(株)技師。国内業務を経て、2024 年よりアンゴラの稲作振興プロジェクトやブルンジ、ナイジェリアをはじめとする海外プロジェクトに従事。専門は作物学。

## 清水 敬祐

日本工営(株)課長。17 年以上にわたり海外業務に従事し、東南アジア・南アジア、中南米、アフリカ地域における農業分野の技術協力プロジェクトや調査案件を担当。専門は農業経済/経営。

## 青山 健太

日本工営(株)技師。2 年間にわたり JICA 青年海外協力隊として活動し、その後 7 年以上にわたり海外業務に従事。現在は、東アフリカ共同体におけるコメ流通に関する調査案件に従事。専門はコメのバリューチェーンおよび作物学。

## 7 参加人数

会場来場 : 15 名 (事前登録 16 名)

オンライン : 15 名 (事前登録 29 名)

(主催者側 : 21 名)

## 8 パネルディスカッション

### 8.1 ガイダンス「国際協力と開発コンサルタント」

冒頭のガイダンスとして、NTC インターナショナル(株)の森社長 (ADCA 理事) より、農業分野における国際協力事業の種類、開発コンサルタントの位置づけと関連機関との関係、コンサルタントが国内外で担う業務内容や成果品の種類、さらには開発コンサルティング企業の業界地図について解説が行われた。

### 8.2 パネルディスカッション「ベテランコンサル&若手コンサルのホンネ」

#### テーマ① 国際協力の未来

最初に国際協力分野で求められる技術や能力、そしてそれらをどのように身につけていくかについて、主にベテラン職員から意見が述べられた。

#### - 現地に適した技術提案の重要性（江口氏）

江口氏からは、日本国内で技術を習得したうえで海外業務に従事した経験を踏まえ、以下の点が指摘された。

- ハード面の事業では維持管理が極めて重要であり、日本の技術をそのまま海外で再現できるとは限らない。
- 現地の人々が使いやすいシステムを設計することが不可欠である。
- 相手国の文化や生活スタイルを理解し、それらを踏まえた提案姿勢が求められる。

#### - 継続的な学習姿勢の必要性（清水氏）

清水氏は、コンサルタントに求められる能力の多様性に触れ、次の点を強調した。

- 国際協力では、全く知らない国や人々と仕事をすることが多い。そのため、知識と経験を常に更新し続ける姿勢が不可欠である。
- 学び続ける力そのものが、コンサルタントとしての重要な資質となる。

#### - 専門資格と幅広い技術の必要性（福田氏）

福田氏からは、専門性と業務経験の両面について意見が示された。また、自身のエンジニアリング能力の深化のため、国内事業への異動を希望した経緯についても紹介された。

- 技術士資格は不可欠であり、発注者からの評価にも影響するため、学生時代から基礎学問をしっかり学ぶことが望ましい。
- 実務経験も必要だが、入社後に経験を積み重ねることで十分に対応可能である。
- 海外業務は国内業務に比べ、求められる技術が「薄く広い」傾向にあり、幅広い能力が求められる。

次のトピックとして、主に若手のパネリストが国際協力の現場で感じている魅力ややりがいについて意見が共有された。

**井ノ口氏**は、国際協力の魅力として「多様な関係者と関わり合いながら事業を進められる点」を挙げた。技術面に限らず、さまざまな課題に対して関係者と協力しながら取り組み、成果が得られたときに大きなやりがいを感じると述べた。

また、**青山氏**は、海外業務ではローカルスタッフを含む多様なステークホルダーとの共通認識の形成が不可欠であり、そのためには粘り強い協議が求められることを挙げられた。業務は困難を伴うが、課題を乗り越えて成果が出た際には大きな達成感が得られると述べた。

最後に、国際協力の未来について、ODA および国際協力の展望と、それにどのように対応していくべきかについて、福田氏および清水氏から見解が示された。

#### - 限られた資金で効果的な活動を日々模索する（福田氏）

福田氏は、先輩方の努力により事業遂行のレベルが向上していると評価した。従来はダム建設やインフラ整備が中心であったが、近年は整備したインフラをどのように活用・販売するかといったバリューチェーン構築や、農家の生計向上支援など、事業内容が多様化してい

ると述べた。また、日本の経済状況を踏まえると国際協力に充てられる資金は減少傾向にあるため、限られた資金で効果的な活動を展開する工夫が求められると指摘した。

#### - 今後求められるプロジェクトの在り方（清水氏）

清水氏は、現在は若手が活躍しやすい環境が整ってきていると述べた。入社当時は「10年の修業が必要」と言われていたが、現在では入社2年目で海外業務に携わる職員や、7年目で専門分野を確立して活躍する職員もいる。

また、求められる能力も多様化しており、農業分野では栽培技術に加え、バリューチェーン構築、農家の経営支援、民間企業との連携など、幅広いスキルが必要とされていると述べた。

さらに、国際協力の潮流として以下の点が挙げられた。

- ・ 各国の努力により貧困が減少し、農業分野の支援は縮小傾向にある。
- ・ 地域的には東南アジアからアフリカへの支援へシフトしている。
- ・ 個別国による援助から、多国間ドナーによる支援が増加している。
- ・ 技術移転は、日本の技術をそのまま持ち込むのではなく、現地と共に開発・構築する形が主流になりつつある。

清水氏は、今後の国際協力はパブリックセクターが主導するだけでなく、民間投資を組み合わせ、現地も利益を得ながら開発課題を解決する「新たな価値を提供するプロジェクト」が求められるとまとめた。

## テーマ② 開発コンサルタントにおける働き方

開発コンサルタントの働き方やワークライフバランスについて、コロナ過を経た変化や個々の実践例を踏まえた議論が行われた。森理事からは、開発コンサルタントの業界は「出張が前提」である点が他業種と大きく異なり、コロナ過で大きな影響を受けたことを踏まえ、働き方の現状と課題について意見が求められた。

#### - 働きやすさを支える制度と対話の重要性（福永氏）

福永氏は、女性社員の出産・育休に対する会社の理解が大きな支えとなっていると述べた。また、自身の経験も踏まえ、どの程度出張が可能かといった点について、常に会社と対話を重ねながら調整していると説明した。

制度面では、コロナ禍を経てオンライン環境が整備され、在宅勤務が可能になったことで働きやすさが向上したと評価した。

#### - 在宅勤務制度の拡充と運用上の課題（江口氏）

江口氏は、海外業務が基本である業界においても、国内滞在期間中は在宅勤務を積極的に活用するなど、会社の雰囲気を変化させてきていると述べた。

承認制ではあるものの、在宅勤務の日数制限がなく柔軟に利用できる点は利点である一方、勤務時間管理が難しくなるという課題も指摘した。現在は、在宅勤務申請システムの構築、残業時間管理システムの導入、インターネットセキュリティ強化など、運用面の改善が進め

られている。

#### - 育児と業務の両立に向けた工夫（青山氏）

青山氏は、2歳の子どもを育てながら業務に従事しており、ワークライフバランスの重要性と難しさを日々実感していると述べた。出張中は業務に集中し、可能な限り多くの仕事をこなす一方、日本に戻った際には有給休暇を活用し家族との時間を確保するよう努めている。帰国後の家事・育児にも最善を尽くしているが、思うようにいかないことも多く、試行錯誤しながら両立を図っていると語った。

#### - 若手の業務内容（井ノ口氏）

井ノ口氏からは、海外業務2年目における若手職員のための主な業務内容について説明がされた。若手が担当する業務の中心は調整業務であり、スケジュール管理や予算管理、現地スタッフとの調整などが多くを占める。専門的な技術業務に携わる機会はまだまだ多くないものの、プロジェクト全体の仕組みを理解するうえで重要な役割を担っていると述べた。また、経験豊富な技術者の補佐として業務に関わる場面も多く、プロジェクト運営の実務を間近で学べる点は、若手にとって非常に有益な経験になると語った。

#### - コロナ過での業務内容（森理事）

森理事よりコロナ禍における業務対応の経験が紹介された。当時は南米の案件に従事していたが、現地で予定していた重要な農民とのミーティングが実施できず、事業運営に大きな影響が生じたという。

この状況に対し、現地カウンターパートに代替的なミーティングの実施を依頼するなど、各種調整を行いながら、打合せ内容の共有や進捗確認はオンラインを活用して対応した。森氏にとっても初めての経験であり、多くの困難を伴ったが、特に南米との大きな時差が課題となり、現地の事業スケジュールに合わせて深夜・早朝に連絡を取るなどの苦労があったと述べた。

### 8.3 質疑応答

会場およびオンライン参加者から、「Slido」を用いた質疑応答が行われた。多くの質問が寄せられ、パネリストは自身の実務経験を交えながら丁寧に回答した。

質問内容は幅広く、インフラ整備が十分でない地域における農業支援の方法や、減少する農地への対応策といった農業開発に関するものから、コンサルタントに求められる第2外国語能力に関する質問まで多様であった。また、ジェンダー、獣害被害、ODA卒業国との関わり方、難民キャンプの支援方法、農産物の販売や生活改善に関するテーマなど、国際協力の現場で直面する幅広い課題に関する質問が寄せられた。

### 8.4 総括（森理事）

パネルディスカッションの総括として、**森理事**は、コンサルタントのキャリアは人生と同様に継続して積み重ねていくものであり、自身もまだ途上にあると考えていると語った。ま

た、コンサルタントは自ら積極的に行動し続ける姿勢が求められ、取り組むべき課題は今後も多く存在すると指摘した。

そのうえで、「キャリアに終わりなし」と締めくくり、継続的な成長の重要性を強調した。



熊谷企画部長（ADCA）による開会挨拶



堀田代表理事（ADCA）による開会挨拶



森理事による趣旨説明



パネリスト（右から江口氏、福田氏、青山氏、清水氏、井ノ口氏、福長氏）

## 9 グループワーク

グループワークでは、日本工営(株)の**三門茜技師**の進行のもと、開発コンサルタントが技術協力プロジェクトの案件形成時に作成する計画表（PDM：Project Development Matrix）の作成を模擬的に実施した。

参加者は複数のグループに分かれて配布資料を参照し、簡易版のPDM作成に向けて、課題の選定、成果の設定、ならびに成果を実現するための活動内容について議論を行った。各グループには、ADCA 会員企業の若手技師やパネリストがファシリテーターとして配置された。

グループワークの最後には、各グループによる発表が行われた。2つのグループは「灌漑施設の機能不全」を課題として取り上げ、異なる視点から活動案を提示した。これに対し**三門技師**は、現地住民へ議論の場を提供する点に着目したこと、活動を三つのテーマに整理して深掘したこと、さらに農民の理解促進に向けた取り組みまで検討したことなど、多角的な視点から活動案を構築した点を高く評価した。また、3つ目のグループは「気候変動による

農業生産性の低下」および「農業教育の不足」を課題として選定し、長期的な教育活動を中心とした提案を行った。中長期的な成果を見据えた計画となっている点が特に優れていると、**三門技師**から評価された。



グループワークの説明を行う三門技師



グループワーク発表の様子

## 10 WEB 座談会

WEB 座談会では、オンライン参加者から開発コンサルタント業界に関する質問を自由に受け付け、参加企業三社の若手がそれぞれの視点から回答することで、業界への理解を深めていただくことを目的として実施した。

各社から若手コンサルタントが参加し、(株)三祐コンサルタツの**森恒樹技師**、NTC インターナショナル(株)の**大島拓海技師**、日本工営株式会社の**青山健太技師**（進行役兼務）が、実際の業務経験に基づき意見や知見を共有した。さらに、**森理事**および**清水敬祐氏**にも相談役として参加いただき、議論の補足や助言を行った。

参加者からは、業務内容やワークライフバランスに関する質問として、年間における国内業務と海外業務の比率、海外出張が多い中でのプライベートや家庭との両立方法、海外業務と国内業務の違い、女性のキャリア形成など、多岐にわたる質問が寄せられた。

加えて、参加企業それぞれの特色や他社に対する印象、海外協力隊経験者の有無、国際開発とは異なる専門分野のバックグラウンドを持つ社員の存在などについても質問があり、活発な意見交換が行われた。

## 11 交流会

第3部では、海外の料理（JICA 地球ひろば、J's Cafe）を楽しみながら参加者との交流が行われた。日本工営(株)清水敬祐課長による開始の挨拶の後、食を通じ、パネリストや現役コンサルタントと参加者との交流が行われた。

## 12 参加者の感想（抜粋）

- ・ PDM 手法や懇親会でプライベートから実務に至るまで色々な話を聞いた。
- ・ 様々な経験をしてきた人が各々の立場から発言をしており、自分のキャリアを考える上で参考になった。
- ・ 実際に働かされている社員の皆さんのお話を聞くことができ、開発コンサルタントとして働くイメージができました。
- ・ 開発コンサルタントの1日の過ごし方や、家庭との両立の仕方などを知ることができ、自身のキャリア形成の参考になった。
- ・ 日本から行う今後の開発協力の在り方に関する意見を聞くことで、経済学を専門にする自身がこれからどのように途上国開発に携わることができるのかを考えるきっかけになった。

## 総括

今年度で 15 年目となる本セミナーは、農業農村工学、国際開発学、農業経済、栽培学等の様々な専門分野の方々にご参加いただき、パネルディスカッションやグループワークおよび WEB 座談会を通じて、農業開発の魅力を感じてもらうことができた。

事後アンケートでは、回答者 19 名中 11 名が「満足」、8 名が「やや満足」と回答し、セミナー全体に対して高い評価が得られた。また、第 1 部パネルディスカッションでは、よりインタラクティブなセミナーを実現するために「Slido (スライドー)」を使用したところ、参加者から「匿名で質問を送ることが出来た点が良かった」、「質問フォームがうまく活用できてよかった」などの意見が寄せられた。一方で、第 2 グループワーク参加者からは「実践的なグループワークという点でとても良かったが、時間が短くてきちんと議論することが出来なかった」といった意見もあり、次回開催に向けては第 1 部・2 部の時間配分を見直すことが課題となった。

今回の ADCA セミナーの開催にあたり、ご協力いただいた農林水産省、農業農村工学会、JICA、そして、海外技術協力に係る豊富な知識と経験を駆使して本セミナーを成功に導いていただいたパネリスト、セミナー運営メンバーおよびファシリテーターの若手技術者の皆様、そして何よりご参加いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。